

伊藤亜人著

『北朝鮮人民の生活 脱北者の手記から読み解く実相』

弘文堂, 2017年

はじめに

北朝鮮はフィールドワークによる研究が通用しない研究分野である。また資料への接近も容易ではない。そのため、北朝鮮で生まれ育った脱北者たちは貴重な研究対象になる。にもかかわらず、脱北者は“北朝鮮を不法脱出した”という理由から信頼性が常に疑問視され、その発言が積極的に活用されてこなかった。

しかし、1994年金日成死亡後、配給制度も次第に崩れ、もはや崩壊されるものと考えられていた北朝鮮は依然として体制を維持している。

この事実は、北朝鮮に対するこれまでの関心、つまり指導者とエリート層、そして政策だけでは今の北朝鮮を読み取るのに限界があることを示している。その意味で、脱北者の手記をもとに、北朝鮮を‘人民’の観点から文化人類学的アプローチをした伊藤亜人の『北朝鮮人民の生活-脱北者の手記から読み解く実相』の内容は、我々に示唆するところが多い。

1. 本書の構成と内容

序章「北朝鮮研究の視点」は、社会主義体制、日本における関心、東アジアと日本、ナショナリズム視点から生活者の視点、朝鮮半島北部、北韓学、長期的・歴史的展望、社会主義体制の疲弊、「急変事態」をめぐる、社会の流動性、脱北者の存在、インタビューと手記というカテゴリーに分けて、本書を貫く問題意識と研究意味について論じている。政治経済分野に偏っている日本の北朝鮮研究の状況を説明しながら、本書の意義ともいえる研究の視点、つまり国家から生活者への視点の転換を説明する。

1章から11章までは脱北者のインタビューと手記に基づいて分析した北朝鮮社会の変化をテーマ別に考察している。このうち、1章から6章までは住民と社会統合、社会主義化、組織生活、産業政策、協同農場、住民に対する供給体系というテーマで脱北者の手記を通じて北朝鮮社会の基本体制がどのようになり立っているのか分析する。また7章から11章までは自力更生や副業活動、使用耕作地、市場（チャンマダン）・商い・交換、タノモシ、盗みの社会的含意をテーマに、苦難の行軍後、北朝鮮社会の変化した姿を経済と社会部門を中心に論じる。

序章 北朝鮮研究の視点

第1章 住民と社会統合

第2章 社会主義化

第3章 組織生活

第4章 産業政策

第5章 協同農場

第6章 住民に対する供給体系

第7章 自力更生と副業活動

第8章 私的耕作地

第9章 市場（チャンマダン）・商い・交換

第10章 タノモシ

第11章 盗みの社会的含意

終章 北朝鮮社会の特異性と普遍性

2. 本書に対する評価

まず本書で最も評価できることは、北朝鮮研究の見方を“国家”だけにとどまらず、“人民”に拡張させたという点である。国家政策や制度を優先して指導的位置にあるエリートのみに関心を持

つ“国家アプローチ”から民衆生活、地域社会にも関心を持つ“人民アプローチ”に北朝鮮研究の幅を広げたのである。

韓国では2000年以降、北朝鮮住民に関心を置いた北朝鮮社会研究の必要性が共有され、脱北者のインタビュー等を踏まえた論文と著書が多く出ている。これに比べて日本はいまだに指導者を含むエリートたちや政策などに関心が集中しており、分野も政治、経済などに限定されている。

しかし、1990年代の「苦難の行軍」後、北朝鮮社会の変化は“人民”たちが自ら作り出したところが多く、これは政策にも表れており、今日の北朝鮮社会を読み取るのに重要なキーワードになっている。北朝鮮研究において、人民に関心を向けた人類学的なアプローチをさらに取り入れなければならない理由はここにある。

まず本書は‘人民’を研究対象だけにとどまらずに、参加までさせた。つまり人民自らが自分のストーリーを書くことにより、自分の人生を見つめる事ができ、ある程度の客観的記述が可能にした。ほとんどの脱北者らは、インタビューする際、質問者の期待に応えるために自分の価値を高めたり、あるいは‘脱北’を理解させるために、自分を正当化する傾向を持つ。したがって一度のインタビューだけで北朝鮮社会を説明する‘事実’を手に入れることは難しい。これを補完するために、本書は研究に参加した脱北者に自由なテーマで自分のストーリーを何度も書かせるようにした。このような作業は、脱北者たちの証言の情動的価値と質を高める結果を果たしたと考える。

本書で脱北者とのインタビューと手記を通じて得た発見のうち、大きな意味を持つとみられるうちの一つに、“生活物資や食糧の供給システムが破綻しながらも社会主義理念と原則は堅持されたものの、一方では、問題に対処する様々な規制緩和の措置があった”という点があった。価格と賃金の引き上げなどの内容を盛り込んでいる2002年の7.1 経済管理改善措置で注目すべき部分はまさに市場が許容されたということである。経済管理改善措置後、北朝鮮全域に約300か所以上の市場ができたという証言があるほど、7.1 経済管理改善措置は、北朝鮮経済に‘チャンマダン（市場）

経済’が本格的に登場するようになったきっかけの一つであった。これは北朝鮮政府が計画経済の失敗を認めて、1990年代半ば以降、人民が作り出した変化、つまり市場で自ら生計を立てる現実を受け止めこれを制度化させた例として考えられる。すなわち人民の変化が北朝鮮政策に影響を与えたものである。

しかし、このような部分は、北朝鮮が発表した政策に接しただけでは発見が容易ではない。本書が脱北者とのインタビューを通じて7.1 経済管理改善措置の前後の状況を把握したことにより、7.1 経済管理改善措置と人民らとの相関関係を分析することが可能となった。

本書でさらに注目できる成果は、現在の北朝鮮社会について、公式と非公式の一体化の観点から説明したことである。旧ソ連及び東欧など、以前の社会主義国家でも計画経済のもとで地下経済、2次経済などといわれた非公式経済が存在した。しかし、公式経済と分けられ、社会主義経済の二重性と説明された。

しかし、北朝鮮は、公式の規制の下に実際の社会過程は非公式的關係と行動で展開されるという点で、公式と非公式の一体化が行われている。このような現象は、経済活動だけでなく、政治過程、社会生活など、各方面で現れている。北朝鮮社会で公式と非公式が一体化された理由については、11章「盗みの社会的含意」で詳しく説明されている。盗みが国家と党の指導理念に反することであり、法的にも違法行為であるにも関わらず、社会のいたるところで、盗みだけでなく、横領、賄賂など、様々な形で現れるのは、盗みをしないと生き残れないという切迫した状況があったからだ。

つまり生き残るため盗みは犯罪行為でないという考えが容認され、これは非公式部門をさらに活発にし、結局、非公式が存在しないと生活がなり立たない、いわば公式と非公式の一体化を作り出した。これは現在の北朝鮮を読む重要なキーワードであろう。

本書のもう一つの成果は平壤ではなく地方に注目したことである。これまでの北朝鮮社会に対する研究は、平壤に集中して行われる場合が多かった。しかし、平壤は、他の地域に比べて階級の高

い北朝鮮住民たちがより優れたもてなしを受けるところであり、北朝鮮社会を一般化する例としては適切でない。さらに、チャンマダン（市場）経済は国家の配給システムが中止され始めた地方から生まれた。「苦難の行軍」以降、北朝鮮社会の変化を説明するに当たって地方への関心も必要な理由はここにある。

このような研究成果がある一方で多少物足りない点がある。一つは、今回の研究の主要対象の脱北者に対する説明が足りないということである。まず今回の研究に参加した脱北者らの身元を簡単に整理して明らかにした方がよい。北朝鮮の家族の安全を懸念して名前と具体的な地名は明らかにできないが、職業と道、市（郡）などの大まかな地域だけでも紹介することで、北朝鮮のどこのどのような地方出身者が、今回の研究に参加したのかを確認できる。

北朝鮮は2000年以降チャンマダン（市場）経済が活発になり、以前に比べて地方間の移動と交流がより容易になった。その結果、地域差が縮まったが、それでも依然として地域と職業によって生活と文化の違いが存在する。したがって、研究対象の職業と地域をまとめて紹介すれば、今回の研究を理解する一助となったのではないかと考える。そのような意味で、取材対象が咸鏡北道に偏っていることも少し残念である。現在韓国に入ってきた脱北者たちは、総勢約三万人でほとんどが咸鏡南北道出身である。しかし、南地方出身の脱北者たちも少ないながら存在するため、彼らも可能な限り対象にすれば、テーマをより一般化させることができたのではないだろうか。

さらに、脱北者の定義や特徴、また脱北傾向など研究対象に対する説明をあらかじめ行った方がよい。‘脱北’という特徴のため脱北者たちは、北朝鮮社会を理解する主要な資料であるにもかかわらず、インタビューの信頼性を疑問視する人たちが多くいる。しかし、すでに韓国にきた脱北者が三万人で、ほとんどが国境地域出身なのでインタビュー内容の事実確認が可能である。そして2000年代以降にきた脱北者は、韓国社会について事前に認知した状態で脱北して来る場合が多く、以前のようにとんでもない嘘をつく場合が減って

きた。そして以前には単独の脱北者が多かったが、2000年代半ばから、韓国にすでに入国した脱北者たちが家族を呼び寄せる場合が多くなった。つまり以前より脱北期間が短くてより生々しい北朝鮮の話の聞くことができるのである。したがって、脱北者の定義から1990年代、2000年代以降の脱北者の違いは何か、また脱北傾向もどのように変わってきたのかを説明できれば、研究対象に対する信頼性がより高くなると考えられる。

内容については、北朝鮮住民たちの逸脱とトンジュ（金主）が扱われなかったことに多少物足りないさを感じる。逸脱とトンジュは、北朝鮮社会の変化を読む重要なキーワードになるからだ。逸脱行為として、盗みに対する詳細な分析があったが韓国ドラマやラジオ、麻薬などはあまり触れなかった。これは北朝鮮住民の意識の変化にもつながる逸脱行為であり、北朝鮮社会の変化を分析する上で重要なテーマだと考える。

トンジュは北朝鮮の言葉で新興資本家を意味し、不動産、運輸業、製造業など社会の多くの資本に関与し、平壤をはじめ、新義州、清津、元山、咸興など比較的大きな地方都市を拠点にして活動する。事実上、北朝鮮の非公式経済はトンジュの資本で運営されるため北朝鮮経済で占める割合が大きい。しかし、本書はこのようなトンジュの存在があまり見えない。

そして最後に少し疑問が残るのは、在日帰国脱北者について、在日から祖国に帰国して再び北朝鮮を離脱した在日帰国脱北者は日本、北朝鮮、韓国のどこにおいても現地住民から一定の距離を保って生活をしてきたため客観的に見ることができると評価した点だ。在日帰国脱北者らが北朝鮮で北朝鮮住民と一定の距離をおいて自分なりのコミュニティを持っていたことは事実である。北朝鮮原住民をゲンチャンと呼びながら日本での食生活と文化を好んでおり、一部の在日帰国者たちは日本から送られた仕送りで比較的富裕な生活をした。しかし、北朝鮮社会の内部から見ると、在日帰国者たちは疎外され差別を受けた存在だった。一般的には徴兵がなく、企業や組織でも一定以上の昇進は難しかった。したがってこのような差別を受けた在日帰国脱北者らが北朝鮮に対して客観

性を持っていると見るのは難しい。在日帰国脱北者たちのインタビューも厳正な比較作業が必要だと考える。

最後に

北朝鮮をめぐる緊張が高まっている。今、目の前にある北朝鮮の核とミサイルから北朝鮮の人民たちの生活に目を向ければ、表には北朝鮮政府の厳しい統制下にいるように見えるが、実際には、

住民らは主体的に自分の人生を変化させようとしている。このような中、本書は北朝鮮の現在はもちろん未来も予想することを目指している。日本における先行研究はあまり例がないが、韓国やアメリカなどの先行研究も共に紹介することが出来れば、本書の価値がさらに高まるのではないかと考える。

(趙允英 早稲田大学大学院)